素材採取家の異世界旅行記

MATERIAL COLLECTOR'S ANOTHER WORLD TRAVELS

5

木乃子増緒

KINOKO MASUO

プニさん
古代馬（アルクトゥムエクウス）という偉い馬の神様。見た目は美女でも、やっぱり馬。よく食べる。
クレイストン
顔が怖い ドラゴニュートの戦士。本気の戦闘時は魔王化する。
リベルアリナ
エルフの郷のありがたい神様。むっちり。
謎ロボ
タケルの仲間の誰かにそっくりなロボット。顔怖い。強い。
リビ
地下墳墓（カタコンベ）に現れるという謎の少女。
ビー
タケルの相棒の子ドラゴン。タケルとカニが大好き。
プロライト
見た目は絶世の美女だが、中身はおっさんという残念エルフ。
タケル
ひょんなことから異世界で「素材採取家」となった本作の主人公。食べることとお風呂が大好き。
主な登場人物

＋　＋　＋　＋　＋

明日できることは明日やる。

座右の銘は成せば成る。まったり生きよう、神城タケルです。

みなさん、お元気でしたか。俺は今、異世界マデウスにいます。

謎の『青年』に不思議な力をたくさんもらい、元気に生活しているよ。

いやいやいや、なんとか死なずにいるよほんとまじで！　死ぬような目には何度もあってきましたよ！

村や町の外は、凶暴なモンスターが悠々と歩く危険地帯。危険な目にあったら、完全に自己責任。死と隣り合わせの日常が当たり前の世界で、俺は素材採取家として生計を立てているわけだ。

冒険者チーム『蒼黒の団』に所属し、見たことのない場所で面白い素材を探しつつ、日々を懸命に生きている。

そんななか、蒼黒の団リーダーであるドラゴニュートのクレイストンが愛用の槍を壊してしまった。思い入れのあるその槍は、かつて伝説の勇者が使っていたものだったらしい。

俺たちはクレイの槍を新調すべく、リザードマンの偉大なる先祖たちが眠っているという地下墳墓に行くことになったんだけど。
平和なお墓参りとはいかないだろうなあ……
やれやれ。

1　渦潮～うずしお～

これから俺たちが向かおうとしているのは、リザードマンの郷へスタルート・ドイエから更に南にある湿地帯、カリディア。
何処までも続く広大な湿地には常に霧がかかっており、太陽の光も届かないほどの雲が空を覆っているという。
リザードマンの偉大な祖先は、なんでそんな雰囲気最悪なところに眠っているのかね。もっと明るくて、誰でも墓参りウェルカムな場所に作ればいいのにさ。
と、ぶつくさ言っていたら――
「大昔、我らの種は沼地に暮らしていたのだ」
なるほどトカゲだからかな。

装備を整えるクレイの説明を聞きながら、さて何を持っていこうかと思案する。
食料も調味料も調理器具も、持ちすぎなくらい鞄に入っているから、改めて何かそろえる必要はない。
クレイの槍の持ち主が眠るお墓には数々の財宝も眠っているらしく、盗掘防止の罠が仕掛けられているそうだ。墓っていうよりダンジョンじゃないですか。ちょっとだけわくわくするな。
大岩に追いかけられる考古学者を連想し、虫だらけの床があったら軽く死ねるなと思う。虫はやめて。
飲み水は大樽四つぶん持った。墓は広いうえに迷路になっているというから、迷ってしまうことも考えて飲み水だけは確保しなくてはならない。迷ったら転移門で入り口まで戻るとして――もしも転移門が使えなくなったとしたら、天井ブチ壊して逃げることも考えよう。
「タケル、貴殿は浄化の魔法も使えるのであろう？」
ブロライトが言い辛そうに聞いてきた。
「やったことあるけどどうだろうな」
「もしも悪霊が出てきたらどうするつもりじゃ！　悪霊に攻撃しても無駄なのじゃろう？」
「墳墓って、故人が手厚く埋葬されているところなんだろ？　だったら悪霊なんて出てこないんじゃないかな」
「わからぬではないか！　どうするのじゃ出てきたら！」

それぞれが支度を進めている最中、そう言って一人抵抗を続けるのはエルフのブロライト。亡霊とか幽霊という得体の知れないものが苦手らしく、俺が地下墳墓に行くことを知らせたら、顔を真っ青にしたのだ。この前キエトの洞で巨大ナメクジみたいな化け物を倒しておいて、今更そんなこと言われても。

「リベルアリナだって悪霊みたいなもんだろ？　実際はそんなに怖くないって」

「おおおお、恐れ多いことを申すでない！　我が尊き神に無礼じゃ！」

ブロライトたちエルフが神と崇める精霊リベルアリナは、尊い存在らしいが見た目がな。むっちりバディのランプの魔人。アレはどう見ても悪霊だ。精霊だって得体の知れないよくわからない存在だと思うんだが。

そりゃ俺だって、クレイから亡霊が出るかもって聞いたときはげんなりした。異様に前髪が長い井戸の女性とか、全身白塗りぱんつ少年を怖いと思う気持ちがある。暗がりで出会ったら、絶対に叫ぶだろう。これは恐怖耐性とか関係ない。精神的に嫌なだけだ。

しかし、それは映画や小説などの空想上の存在。実際に見たことはないし、俺には霊感も一切ない。何より怖いものは、得体の知れない亡霊なんかじゃないんだよ。

それはさておき、地下墳墓はドワーフ王国のヴォズラオの坑道よりずっと広い空間が続いているらしいから、馬車を出して休めばいい。馬車が通れるくらい広ければ、プニさんに引っ張らせてあげよう。

ついでだからとギルド「ネレイド」に寄り、地下墳墓用の依頼も受注することにした。カリディアにしか生息しない野草の採取と、地下墳墓内の蔦に生える葉の滴の採取。どちらも薬として需要があって、すり潰して他の薬と混ぜ合わせることにより様々な効能を発揮するらしい。

地味依頼にしては報酬がいいなと思ったら、地下墳墓に近づくリザードマンはいないから、という理由らしい。亡霊的なものが恐ろしいというより、穏やかに眠り続けているだろう祖先を目覚めさせるのが申し訳ないとかなんとか。主に、郷の外からやってくる一般の冒険者向けの依頼なんだろうな。

ヘスタルート・ドイエを訪れる冒険者は、比較的度胸のある中堅ランクが多い。郷までにある恐怖の吊り橋を何食わぬ顔で渡れる者はなかなかいないだろう。よって下位の冒険者は近づくこともできず、地味な薬草採取依頼の需要はあるが、供給が追いつかないというわけ。

「気ぃつけてにょう」

「深追いはしないことだ。名のある盗賊でも、地下墳墓に入ったきり戻ってこないという話もある」

「にゅふ」

翌日の早朝。

恐ろしいフラグを立てる、クレイの息子のギンさんと、にゅふにゅふ言う村長に見送られ、最後まで嫌がっていたブロライトを何とか説得して出発した。ブロライトを宥めるためにも、地下墳墓

内でカニ入り麦飯雑炊を作らねばな。
郷の英雄であるクレイが地下墳墓へ赴くことを極秘にしておこうと言ったのは、村長だった。大々的に知られてしまったら、我も我もと同行を志願する者が後を絶たなくなるらしい。それは困る。いくら広々とした場所だったとしても、大勢のリザードマンが押し寄せてご先祖様を安眠から目覚めさせるようなことになれば、いろいろ怖いじゃないの。
こうして俺たちは、一路カリディア湿地帯を目指すこととした。
ヘスタルート・ドイエからクルルク街道を南下。郷のこっち側は陸続きになっているから、恐怖の吊り橋は渡らないで済んだ。
広い街道に出てから馬車を出し、馬化したプニさんにひたすら引っ張ってもらう。プニさんは相変わらず馬車を引くのが楽しくてたまらないらしく、足取りはとても軽やかだ。
街道沿いの青く穏やかな海が朝日に煌めき、遠い沖では巨大トビウオが大ジャンプを繰り広げている。眩い海面を眺めながら、その先にあるであろう遠い陸地へと思いを馳せた。
そのうち他の大陸に渡ってみるのもいいな。ダヌシェの港から西の大陸に渡るための定期船が出ていた。それに乗って西の大陸に行けば、更に他の大陸に渡るための船に乗ることができる。海原を、水の上も進めるプニさんに走ってもらうという方法もあるが、それよりも船に乗ってみたいんだよな。ダヌシェの港に停泊していた巨大なガレオン船に興奮したのは言うまでもない。帆船なんて芦ノ湖でしか乗ったことないからな。あれはエンジンついていたけど。

「タケル、筒の中は何だったのだ」
「あ、忘れてた」
馬車の中、御者台のすぐ裏にある談話スペースでくつろいでいると、御者台に乗って手綱を握っているクレイに声をかけられ思い出した。
村長から託された、ヘスタスに関する何かが書かれてあるという文献の入った筒。
クレイに罵声を浴びせられる前に鞄から筒を取り出し、「開けるときちゅういしてね」の警告文に従って、そろりそろりと蓋を開ける。ほんの僅かな魔力を感じたが、指先にちりりとした静電気が走った程度だった。
「何が入っておるのじゃ」
「ちょいお待ち」
蓋を開けたら強烈な酸が飛び出る……というようなこともなく、中には一枚の古びた油紙。油を浸み込ませたその紙は耐久性に優れており、重要な情報を保存するために用いられることがある。
しかし筒に保存されていた油紙には、何も書かれていなかった。
「うん？？」
「なんじゃ。何も書かれてはおらんではないか」
残念がるブロライトに油紙を見せ、御者台に乗っているクレイにそれを渡すと、クレイは紙を裏表と確認し顔をしかめた。

「村長が大切に保管しておった文献であるから、何かしら意義深いことが書かれていると思うたが……」
太陽に透かして見ても、何も浮かび上がらない。
何にちゅういすればいいんだ。
「長年保管していたことによる劣化か？」
「そうかもしれないな。ああ、それともアレか？　この場合、レモン汁を垂らしてドライヤーで熱を加えるとオッテンドルフの数列がだね……」
「れもん？　どらいあ？？」
一部マニアにしかわからないであろう映画のネタはさておき、そんな化学反応を試さずとも、俺には心強い先生がおられるではないか。
「調査」

【ヘスタス・ベイルーユの遺言】
七百八十五年前に亡くなったリザードマン、ヘスタス・ベイルーユの遺言書。

なるほど遺言書。
文献というのとはちょっと違う気もするが、そりゃ書いてある文字が消えていて読めなければ、

中身がどんなものなのかもわからないままだったのだろう。
「うーん、消えた文字はどうすればいいんだろうか」
「元に戻すことはできぬのか？」
「元に戻す？　どうやって？」
「お前には壊れたものを直し、修復する魔法があるではないか」
あっ、はい。
そうでしたそうでした。
消えた文字を、消えてなかった状態にまで戻す。つまり、修復をすればいいんだな。
クレイにいろいろと突っ込まれるのも面倒だったので、無詠唱で修復を唱えた。すると油紙に文字がじわりと浮かび上がる。
特殊なアナグラムではなく、筒に書いてあった文字と同じ古代カルフェ語だった。
「おおお、文字が浮かび上がってきた！」
「成功したみたいだ」
「ピュウウィ」
油紙をしきりに嗅ぐビーを落ち着かせ、はしゃぐブロライトと何か文句の一つも言いたげなクレイに紙を見せる。
「我らには読めぬようだ。タケル、声に出して読んでくれ」

「えっ」
「なんと書かれてあるのじゃ」
音読は苦手なんだけどな。
仕方がない、このまま読んでやれ。
「封印の魔法を施した筒を、正しい呪文で開けた君に万歳をあげる。ばんざあい、ばんざあい……」
……封印の魔法ですって。
……正しい呪文なんて唱えませんでしたけど。
え。何気なくぽこんと筒の蓋を開けちゃったんだけど、もしかして特定の呪文を唱えないと開けちゃいけないものだったのかな。いやいやいや、まさかそんなー。だって元々ゆっるい蓋だったし。ちょっと魔力を感じたけど、ちょっとだけだし。
気がつけば、ジトリ目で俺を見つめるクレイとブロライト。その目ほんとやめて。俺が悪いわけじゃないでしょうが。ヘスタスが悪いんだろうが。こんな頭の悪い文章を遺しやがって。これをそのまま音読すると、ポラポーラの二の舞だ。領主の屋敷で読まされた恥ずかしいポエムを思い出し、あのときの視線も痛かったなあと。
俺は続きに何が書いてあったのか伝えていく。
「えーと、まあ、これはヘスタスの遺言書みたいなものだ。自分が死んだら偉大なる祖先が眠るカリディアに躯を埋葬してほしいってことと、遺産は嫁さんと子供たちに全て渡すっていうのと、

えーと……？　月と太陽の……槍を……？　なんだこれ」
「如何したのだ」
文字が消えているわけではない。俺が止まったのは、書かれてある文章に疑問を持ったからだ。
「クレイ、月と太陽の槍も埋葬してくれって書かれてあるんだけど、ヘスタスの槍っていうのは一本じゃなかったわけ？」
「……いや、そのような話は聞いたことがない」
「でも、月の槍と太陽の槍は対になっているから放したくないって……あ、ちょっと待った。太陽の槍は生涯おれっちを認めてくんなかったのが心残りだったなあ、無念無念☆って書いてある。っていうことはつまり……」
ヘスタスの槍は二つあったということ？
でも調査先生はそんなこと教えてくれなかったな。槍の名前だって月なんてついてなかった。ヘスタスの大槍、とだけ。
「クレイ、もう一度折れた槍を見せてもらってもいいかな」
「構わぬが……」
御者台に乗っていたクレイがブロライトと席を交換し、私室へと行く。しばらくすると、朱色の布に大切にくるまれた槍を持って戻ってきた。
「ちょっと見せてもらう」

布を恭しくそろりと開き、壊れて二つの棒になってしまった槍を先端からじっくりと見ていく。柄の先まで見事な文様が刻まれているが、特に目立ったものはない。
刃の部分から柄にかけてもう一度目を凝らして見てみると、刃と柄を繋ぐ金属製の装飾部分に月の絵が描かれているのに気がついた。あまりにも小さい。小指の爪よりも小さい絵だったから見逃していたんだ。
「クレイ、ここに月の絵がある」
「なんと？　……まことであるな。このような絵が描かれていたとは、気づきもせなんだ」
「じっくりと何かを探すつもりで見なければ、絶対に気づかれないように造られていたのかもしれない」
他の装飾に紛れてしまい、それが月であるのかどうかすら判別するのも危うい。しかし、三日月のようなこの絵は、たぶん月を表していると見て良いと思う。
「もしかしたらだけど、これが月の槍だとしたら……もう一つ、太陽の槍が存在するんじゃないかな」
「なんと？　そのようなこと、俺は知らぬ」
「そりゃ知らないだろうよ。この遺言書で今確認したんだから」
なんせ七百年以上も前に亡くなってしまった人が書いた文章だ。
俺がこの筒を開ける前に誰かが先に開けていて、正しい呪文を唱えなかったせいで文章が消えてしまっていたのだろうか。
ともかく、この遺言書は本物だ。調査先生は事実だけを教えてくれる。
もしかしたらヘスタスの埋葬されている場所に、太陽の槍があるのかもしれない。
勇者ヘスタスが、生涯おれっちを認めてくんなかったとのたまった、槍。
それが実在したとしたら――

2　砂紋～さもん～

ご機嫌なプニさんに馬車を引いてもらい、午後にはカリディア湿地帯に着くことができた。
湿地帯で街道が終わっているため、これより先に行く者はぬかるんだ湿地を徒歩で移動しなければならない。ところどころ底なし沼のような箇所があり、うかつに侵入すれば命を落とすこともある。
湿地帯に入ったとたんに、重苦しい湿気と濃い霧に包まれた。まるで来る者を拒むかのような異様な雰囲気に、少しだけ帰りたくなる。というか身ひとつで来ていたら、方向感覚を失って死ぬまで迷うことになっていただろう。怖いな。
しかし我らが馬神様プニさんに、そんな湿地は何のその。湿地に足を取られないよう少しだけ浮

いて、馬車をぐいぐいと引いてくれた。あまりにも軽やかな足取りだったので、うっかりと目的地である地下墳墓を通り過ぎそうになったくらいだ。

「見えたぞ、あれが入り口だ」

湿地帯に突如現れたのは、枯れた木と苔とシダ系の植物が生い茂る小高い丘。村長に教えてもらった場所に、それは確かにあった。

これまさか巨大な亀の甲羅じゃないよな、と思いつつ御者台から声をかけてきたクレイの視線の先を見ると、丘の中腹にぽかりと空いた穴。穴に続く石でできた古びた階段が、中まで続いていた。苔にまみれた階段には誰かが歩いた跡がない。

「しばらく誰も来ていないみたいだけど、墓参りとかってしないの？」

「ここは古い墓であるからな。偉大なる祖先の眠りを妨げるような真似はしたくないのだ」

エジプトのピラミッドを訪れるようなもんかな。あそこは観光客にまみれているけど。

さすがにあの入り口だとクレイがやっと通れるくらいだ。馬車は降りて一度鞄に入れ、中に入ってから様子を見てまた出せばいい。

人になったプニさんは地下墳墓に続く入り口をじとりと見つめ、静かに頷いた。

「禍々しいものは一切感じられません。ブロライト、そう怯えずとも悪霊が出ることはないでしょう」

「まことか？」

「たぶん」

たぶんかよ。

信心深いエルフはプニさんの言葉を素直に喜んでいたが、まだここは墓の入り口。地下墳墓は湿地帯の地下にある。クレイすら初めて入るのだから、誰も頼りにならないと思っておかないと。

迷ったときの最終手段として天井をブチ破るつもりだったが、天井を壊したら大量の水が流れ込むかもしれないなあ、なんて余計な心配をする。そうなったらそうなったときに考えるとして、今は解明している範囲だけの地図を解読しておこう。

村長に託されたこの地図は、地下墳墓の全容の三割ほどしか描かれていない。しかも盗掘防止の罠などは記されておらず、とにかくまあ気をつけにょう、と言われただけ。

それならみんなに注意喚起するべきだな。

「中に入ったら余計なものに触れないように。歩く場所に全て罠が仕掛けられていると思って、用心して進むぞ」

「うむ。お前は罠の仕掛けられた場所に入ったことはあるのか？」

「いや、ないよ。だけど、知識ならある」

大岩が追いかけてくるかもしれない。床が開いてトゲだらけの奈落に落ちるかもしれない。壁から無数の矢や槍が飛んでくるかもしれない。そういった前世の映画の知識は山盛りあるのだ。スフィンクスのような化け物が問題を出してくるかもしれないしな。

「お前には強き魔法があるのです。自信を持ってわたくしを守りなさい」
「プニさん神様だろ？　神様だったら俺たちを守ってくれるもんじゃないの？」
「愚かなことを言うものではありません。わたくしは馬ですよ？」
あ、はい。
豊満な胸をむんっと張ったプニさんの言うこともっとも。
俺たちは力を合わせてランクSの巨大なナメクジを倒したという実績がある。それに、俺はこの世で最強と呼ばれている古代竜にも逢っているのだ。あれ以上の恐怖を味わうことはないだろうし、自分の中にある妙な自信がきっと大丈夫だと言っている。俺の勘は当たるのだ。
「地図によれば、ヘスタスの墓は奥にあるようだ」
「地図に記されてるということは、リザードマンの誰かはそこまで行けたってことだろ。昔の人が行けたんだから、魔王化したクレイが行けないわけないって」
「ピュイ！」
灯光を四つ作り出し、各々の足元を照らすように浮遊させた。
入り口に地点を固定し、これでいつでも転移門で戻ることが可能。
この奥に何が待ち受けているかはわからないが、とにかく行ってみよう。

＋　＋　＋　＋　＋

ぴちょん
ぴちょん

「ピューィーー……」
俺の頭にしがみ付いて怯えるビーの声と、天井から滴る水の音が響き渡る。
苔だらけの階段で滑らないよう用心しながら歩き、入り口からゆるやかな傾斜になっている坂を進んだ。
奥へ奥へと進めば、狭かった天井がより高く、圧迫感のあった空間が広くなっている。巨石が組まれた壁と天井にはみっちりと苔。苔は水分を多く含むため、地上にいたときよりも強い湿気を感じた。
「エルフの郷で感じた湿気ほど嫌なものは感じないから、これは停滞している魔素ではないと思う」
「思ったよりもおぞましいところではないのじゃな。これならば、キエトの洞よりも恐ろしくはない」
「ああ……あっちの洞のほうがよっぽどやばいもん出そうっていうか、実際出たな」
「ピュウィーイ」

ビーがそうだそうだと声を上げると、ブロライトがにへりと微笑(ほほえ)む。さっきから緊張しっぱなしのようだったが、少しだけ力を抜くことができたようだ。
「探査(サーチ)……モンスター反応はない。小動物が素早く動く反応はあるけど、これはネズミとかだろう」
「罠の位置などはわかるか？」
「人為的に何か仕組まれていそうな場所を探せばいい」
クレイに問われて答えたが試したことはない。けれど、やってみる価値はあるだろう。
そもそも床やら壁やら、全てが人工物なのだ。このなかで更に何かの仕掛けを探すとなると、どうすればいいのかな。
「エプララがあります」
「へ？」
「あそこのくぼみに」
プニさんが嬉しそうに指さした先には、壁の一部から生えているエプララの葉。回復薬(ポーション)にもなる薬草だ。
苔にまみれた壁に何故あそこだけ薬草が生えているのかと思う間もなく、プニさんが近づこうとする。
「いやしばし待たれよ、うかつに近づくのは危険だ」

そう言うクレイに俺も同意して頷く。明らかにおかしいって。なんであの壁だけ薬草がもっさり生えているんだよ。
地図には何も書かれていない。だが、あの部分だけに天井から光が射しているのは不自然だ。
「あれきっとアレだ。光に触れたら壁から矢が飛び出てくるとか、床から槍が飛び出てくるとか、そういう罠になっているんだよ」
「なんと⁉　そのような恐ろしい罠があるのか！」
いやわかんないけど。
派手に反応するブロライトはさておき、そういう可能性があるっていうことも考えておくべきだ。
大体、入り口から入ってすぐのところにどうして薬草が、ってお話なんですよ。今後のことを考えて在庫は豊かにしておきたいという冒険者心理が働く、そんな絶妙な場所にあるし。あそこにふらふらっと行って、まんまと罠に落ちるのが関の山。そんな浅はかな真似、できるわけが――
「何もありませんね」
「ちょっと⁉」
エプララの葉を根こそぎ引っこ抜いたプニさんが、眩(まぶ)しそうに光を眺めながら言った。
「何やってんのプニさん！　用心しろって今言ったばかりだろうが！」
「何かがあったとしても、お前はわたくしを守るのです」
「だからって、自分から危ない目にあってちゃ守るもんも守れな」

「ピュイイイイ！」
プニさんへの説教中、ビーが突然激しく鳴いた。
どうしたのだと叫んだ先を見れば、ブロライトが壁から飛び出した突起物を引っこ抜こうとしていた。そんな突起物、さっきまでなかったのに。
「ブロライト！」
「タケル、突然この岩が出てきたのじゃ」
「いいから、離れなさい！」
ていうかなんでそんなもの引っこ抜こうとしているわけ？　ああもう、うかつに触るなって言ったばかりだろうが！
「うん？　あそこにも同じような岩が出てきたようだ」
「ピュイ！」
クレイに言われて視線を移せば、壁から天井から同じような突起物がぼこぼこと出てきた。
無数のその突起物が広範囲に出そろうと、一斉に突起物の先から尖った針のようなものが生えて——
「ピュイイイイーーーッ！」
ビーの警告悲鳴と共に、壁と天井が動きはじめた。
やっぱり罠だったんじゃないか！

「クレイ！　ブロライト！　走れ！　プニさん呑気に葉っぱ食ってんな！」
「これは甘みがあって美味しいですよ」
「いいから走れって！」
「連れて行きなさい」
ぽひょん、と小型化したプニさんがビーの背中に乗る。
そうこうしているうちに壁が狭まる。天井も低くなり、無数の針が侵入者を殺しにかかっていた。
それぞれ全力で走れば針に触れることはないだろう。だが、針だらけの壁は通路の先へとずっと続いている。
「タケル、何処まで走れば良いのだ！」
「そんなん知らん、とにかく走れ！」
「ピュイイイィッ！」
「ビー、そこを曲がるのじゃ！」
針がなさそうな路地を見つけ、右へと曲がる。ビーが先行して入ったとたん、壁に備え付けられていたランプに火が灯った。
「ピュ？」
「なんです？」
灯された火に誘われるようにして、ビーがプニさんを乗せたまま近づくと。

突如床がぼこりと抜けた。組まれた石が全てばらけてしまったように、床に漆黒の空間が現れる。
無我夢中で走っていた俺たちは、その床に足を踏み入れてしまった。
「ぬおおおおっ!?」
「うひょおおおお！」
「落ちる落ちる、フラアアァァイィ！」
落ちるといっても落ちたくない。落ちたくないなら飛べばいい。
三人に飛翔をかけるのは初めてだったが、うまくいったみたいだ。身体から大量の魔力が抜けるのを感じる。特にデカいクレイに多くの魔力が必要だったらしく、そのぶん俺の魔力が奪われる。
ドローンのホバリングを思い浮かべ、その場にぷかぷかと浮き続けられるよう魔力を維持した。
おかげで今の状況が冷静に分析できる。
「ひい……ひいいい……底見えないいぃ」
「何が起こったというのじゃ……」
そもそものはじまりは、やっぱりあのエプララの葉なんじゃないか。
プニさんがあの光に触れたことで壁から突起物が出てきて、それがぼこぼこ生えて、壁が押し寄せてきて、路地を曲がったらランプに火が灯って。
抜けてしまった床の下は真っ黒で、底が見えない。冷たい風が下から流れてくる。風に乗って匂う独特の香り。

「くっさ。なんか臭い。クレイ、屁でもこいた？」
「無礼なことを申すな！　お前はわからぬのか？　この匂いの元が」
「知らない」
屁の匂いではないな。硫黄とも違う。だけど何かが腐ったような、嫌な匂いだ。
「この見えぬ底に……無数の躯があるのだろう」
「え」
「先ほどの刃が出てくる壁の罠で傷ついた者がここに来る。そうすると……」
「床にホイホイされるのか……え。それじゃ、この見えない底には」
ちょっと想像してゾッとした。興味本位で灯光を落とそうと思ったがやめておく。
ぷかぷかとホバリングしたまま、壊れていない床までゆっくりと飛ぶ。恐る恐る床に片足をつけ力を入れ、壊れないことを確認してから床に降りた。
やれやれと力を抜くと、壊れたはずの床にゆっくりと石が戻り、あっという間に元の床に戻ってしまった。なにこれどうなってんの。
「……ひひん。この場に古き魔法の力を感じます。ほんの微かな力なので今までわかりませんでしたが、確かに感じられます」
プニさんの高い声が静かに響き渡った。
つまり、罠の動力源は魔法と。

墓を守るために大昔の誰かが仕掛けた、当時は強かっただろう魔法。
魔法による罠が相手だとすると、予想することもできないじゃないか。俺が知っている罠っていうのは、いわゆるカラクリのようなものだ。
魔法となると勝手が違う。しかも勝手な行動をしちゃうチーメンが同行。
とりあえず説教かます。
今以上に用心するようにと。

＋　＋　＋　＋　＋

最初の侵入者歓迎会ならぬ入り口付近の罠にまんまと引っかかった俺たちは、命からがらでもないがまあ助かった。
考えてみれば蒼黒の団のメンバーで熟練の冒険者って、クレイだけなんだよな。俺は半年近く最低ランクの冒険者として地味依頼専門にやっていたし、ブロライトは戦闘経験は豊富でも冒険者としては俺よりも新米。ビーは可愛いからなんでもいいとして、プニさんは戦力外の馬。
モンスターとの戦いなら慣れているんだけど、何処に何があるのかわからない罠が相手となると、素人同然。
何も触るな近寄るなと言ったところで、罠というのはそれとわからないように設置されているものだ。
「なんか踏んだ！　なあんか踏んだーー！」
「タケル！　壁から槍が！　天井から鉄球が！」
「ピュイイッ！　ピュイイイ！」
「離れろ馬鹿者っ！　ぬおおっ⁉　こっちもか！」
それぞれが均等に罠に引っかかり、騒ぎながらそれでも奥へ奥へと進む。
プニさんとブロライトに説教している暇なんてない。俺が説教されるようなことも多々やらかしてしまった。
ただ歩いているだけで床のスイッチのようなものを踏み、よろけて手をついた壁にも仕掛けがあり、やれやれと腰を下ろした岩にも仕掛けがあったのにはうんざりした。これを考えたやつは、よほど人の本能というものを熟知しているのだろう。賢いというよりも、性格悪いな。
魔法による罠にしてはずいぶん古典的な仕掛けだなと思い調査（スキャン）や探査（サーチ）で調べてみたが、床や天井には何かの仕掛けがあるよ、としか教えてくれない。
ギルドに登録している冒険者の中で、こういったダンジョンの罠対策を専門に扱っている職業がある。俺は勝手にトレジャーハンターと呼んでいるのだが、どうせなら臨時で雇うんだったと今更ながら思った。なんとかなるなると素人考えで来たのが間違いだった。
しかし、罠に引っかかりながらも先へ進めているのだから、実際にはなんとかなっているのだ

けど。
「ああもうやだ。疲れた。今日は休もう？　身体はまだまだ行けるが、精神的にすっごい疲れた」
「ピュイ……」
「賛成じゃ！」
「そうだな。この湿気もまた、不快感を強くさせるのであろう」
「お腹がすきました」
天井が高い広間にやっとこさたどり着き、それぞれぐったりと腰を下ろす。
地下墳墓（カタコンベ）内には空気を循環させるような魔道具（マジックアイテム）があるらしく、腐敗臭は溜まらない。盗掘を防ぐための罠が仕掛けられてはいるが、空気が臭くて先に進めないということはないのだ。
どうしてここまで侵入者を恐れて罠だらけなのかとクレイに聞いたらば、その昔は本当に盗掘が酷かったらしいのだ。
「リザードマンは武勲（ぶくん）を立てると相応の財を貯める習性がある。俺は冒険者となってから手柄のことばかりを考えることはなくなったが、竜騎士（ドラゴンナイト）であった頃は功労（こうろう）に報いるためのものを対価として望んでいた」
「ん？　つまり、竜騎士（ドラゴンナイト）としての報酬以外にも何かもらっていたってこと？」
「ああ。時には黄金であったり、時には宝飾品であったりとな」
現代のリザードマンは昔のリザードマンほど高価な財を貯め込むことはなくなったらしいが、そ

れでも武勲イコール宝石や黄金、と考えている者は多い。
地下墳墓（カタコンベ）は、手柄を立てた英雄と呼ばれるリザードマンが眠っている場所だ。もちろん生涯をかけて集めた財宝も一緒に眠っている。死人に財産なんていらないだろうと考える罰当たりな連中が、夜な夜な盗みに入っていたらしい。
そんな現状を嘆いた当時のリザードマンの村長。どうにかして盗掘を防ごうじゃないかと対策して、今のようにしたらしい。
「それじゃあ、昔から罠まみれの墓だったわけじゃないのか」
「そうだ。盗掘を防ぐための罠を施したのは、大昔のことだ。他種族の術師が地下墳墓（カタコンベ）に魔法をかけたらしい」
ほうほう。なるほどな。
リザードマンは魔力を扱うことに長（た）けていないのに、どうして魔力を感じる罠があるのだろうと思っていたんだ。
「でもさ、リザードマンなら罠にかからないとかなんでそういう仕掛けにしなかったんだろう。これじゃあ、誰も墓参りできないわけだ」
来る者全員あっち行けと追い返してしまう墓ならば、近づきたくもない。
先祖の眠りを妨げたくないとかなんとか言い訳していたが、結局はこれだったんだな。入ったら串刺しにされるような廊下なんて歩きたくないだろうよ。

「うむ。なにゆえこのような造りにしたのかは、誰もわからぬ」
それだけこの墓に眠る祖先の財がとんでもないということだろうか。
ある意味で俺たちも盗掘者のようなものだからな。いやまあ、現代の村長から墳墓に入る許可はもらっているんだから、盗むわけじゃないんだけど。
気がついたら地図に描かれていた場所よりも奥に来ていた。ヘスタスの墓まではあと少しのはずだが、ブロライトの腹の虫の鳴きっぷりから、そろそろ夕飯の時間だ。
何処に何があるのかわからないまま休むのも怖かったので、大いに魔法の力を利用させてもらいましょう。
「まずは湿気解消のために清潔（クリーン）展開、探査（サーチ）でモンスター警戒、結界（バリア）魔石配置して更に警戒」
精神的な疲労は腹いっぱい食って眠れば復活する。
清潔（クリーン）のおかげで清涼な空気を思い切り吸い込めた皆は、やれやれと深呼吸を繰り返した。
この場所が何の用途の場所かはわからないが、じゅうぶんな広さと高さがある。鞄の中から馬車を取り出し、眠る場所を確保。馬車全部に盾（シールド）が施されているし、再度強めの結界（バリア）を展開しておけば見張りも必要ないだろう。
「そういえばモンスターが出てこないな」
「おお、そうじゃな！　罠を避けることばかり考えておったゆえ、モンスターのことなぞ忘れておった」

こういった入り組んだダンジョンのようなところには、気持ちの悪い虫系のモンスターがわんさといると思っていた。それこそ、キエトの洞のようなモンスターラッシュを覚悟していたんだ。
「ふふ。何処かに隠れているのかもしれぬな」
「やめよ？　そういう怖いこと言うのやめとこ？」
「そうじゃクレイストン。おらぬのならばおらぬままで良いではないか」
「タケル、お腹がすきました」
「ピュッピューイ」
ブロライトの言う通りだ。モンスターが出ないのなら、出ないままでいい。
出たら出たで対処するが、出ないなら出ないままでいてください。
約束のカニ麦飯雑炊をさくっと作り、その日はゆっくりと眠ることにした。こんな地下墳墓（カタコンベ）の中でも暖かい布団で眠れる幸せ。馬車を作ってくれたエルフたちに感謝。

翌日、おそらく朝。
朝日が見られない地下のため、放置されたら昼過ぎまで眠っていただろう。俺の身体は疲れにくいが、精神は普通の人間とあまり変わりがない。図太いと言われるが、そんなこともないんだ。死ぬことはないが、死ぬかもしれない目に続けてあえば、どんなヤツでも疲れるだろう。
腹がすいたからと起き出したブロライトに起こされ馬車を降りれば、昨夜余分に作っておいたカニ麦飯雑炊がカラッポだった。全員の朝飯だと言ったはずなんだけどね。よほど気に入ったのか、また食べたいと。
カニ麦飯雑炊の作り方は至って簡単。ほとんどの味はカニの旨味から出ているから、余計な味付けはしなくて良いのだ。
「タケル、昨夜も聞こうと思うていたのじゃが、その茶色い液体は何なのじゃ？」
「うん？　これはなんちゃってめんつゆ」
「めん、つゆ？？」
「そう」
水と醤油（しょうゆ）と砂糖と魚の干物の粉末から作った出汁（だし）、それから甘い料理酒を混ぜて加熱しただけの、なんちゃってめんつゆ。納得がいく味を作るまで頑張ったのだ。
味は確かにめんつゆなのだから、なんちゃってではないのかもしれない。このめんつゆは万能調味料の一つとなった。そのうちこれもベルカイムの屋台村に伝授し、いつでも美味しいめんつゆが買えるようになればいい。
めんつゆ一つで、牛丼かつ丼天丼親子丼が作れるし、このカニ麦飯雑炊も作れるのだ。天ぷらにつけて食べるのもいい。
「沸騰したお湯に麦飯を入れるだろ？　それからめんつゆを入れて味を確認。キノコと野草、ネギっぽい野菜を入れて、ショウガとニンニクを少々。鷹（たか）の爪ならぬカカのツタを刻んで入れて、溶

き卵を混ぜ入れて、最後にカニの身をほぐして入れたら出来上がり。簡単だろ？」
「……それをなにゆえ簡単だと言えるのだ」
だってこんなの、めんつゆで味ができているようなものだからさ。後は具材を入れて煮込むだけ。
仕上げにチーズを入れてもいい。ただし、チーズは王都で出回っている高級食材だから、今は持っていない。そのうち王都に回す分を少し買わせてもらおう。
カニ麦飯雑炊をメインに、焼きたてほかほかの木の実パン。野菜に塩ビネガーを混ぜたサラダを合わせ、温かなハデ茶を飲む。なんて健康的な朝食なんでしょう。デザートに新鮮なロゴの実。
「はあああ！　美味（うま）い！　何を食べても美味いな！　タケルの作りし料理を口にしてしまうと、他の飯が全てわびしく感じるようになった！」
「それは大袈裟（おおげさ）だろ。エルフの郷にだって美味い飯はたくさんあっただろうが」
「そうではない。こうして、旅をしているときに食べられる食事のことを言っておるのじゃ。わたしがタケルと出会う前までは、硬いパンと硬い干し肉であったのじゃぞ？」
ああ、それはクレイからも聞いている。
俺のように何でも受け入れてくれる便利な鞄を持っているわけではないから、どうしても日持ちのする乾燥したものを食べるようになるのだ。
もちろん温めてほぐして食べることもできるが、それは常に警戒をしながら作らないとならない。クレイとブロライトは俺が大丈夫だと言っても警戒を怠りはしないが、それでも以前よりずっと気

を抜くようになったらしい。
「そうですね。その点ではタケルに感謝をしてやってもよいです」
「へえ、プニさんが珍しいこと言うな」
「ぶるるっ、何を申すのですか。わたくしは何事にも感謝をしているのですよ？」
感謝よりも言うことを聞いてくれ。
あれもこれもと興味があるのはわかるが、警戒をしてくれ。
心外だとばかりに頬を膨らませるプニさんの食器を受け取り、清潔（クリーン）をかけてから鞄の中に収納した。
じゅうぶんな睡眠をとり、腹もいっぱいになったら気力も戻る。まだまだ罠が仕掛けられているかもしれないから、互いに警戒を怠らないよう気をつけることとした。
と、言ったところで罠を見分けることなんてできないんだから、死なないように気をつけるしかないんだけど。
全員に清潔（クリーン）を展開し、さっぱりしてもらってから先を進んだ。
奥に進めば進むほど、天井が高く、壁が遠くなっていく。
入り口から比べれば数十倍の広さがある道を、灯光（ライト）の光を頼りに進む。じゅうぶんな広さになったところで馬車を取り出し、プニさんに引っ張ってもらうことにした。プニさん自体と馬車が地面から離れていれば、地面に仕掛けられた罠に引っかかることがない。それに槍やら岩やらが飛んで

きても、馬車には強烈な結界（バリア）がかかっているからヒビ一つ入らない。
俺たちはクレイを真ん中に御者台にそろって座り、左右の警戒をした。
「扉のようなものが出てきたな」
ブロライトに指摘されたように、馬車に乗ってしばらくすると左右の壁に等間隔の扉が出てくるようになった。とても古い扉。
「あれらはきっと、墓だ」
「へえ」
馬車を止めて、クレイに示された扉の一つに書かれてある文字を確認すると、古代カルフェ語で名前が刻まれていた。偉大なるナニナニ、ここに眠る、っていう。
ここに眠る人は皆偉大なんだな。
「ヘスタスの墓はやっぱり特別仕様なのかな」
「村長が言うには、祭壇のようなところにあると」
探査（サーチ）をかけてみるが、扉の向こうに魔力の波動のようなものは感じられなかった。
そういえば道が広くなってきたあたりから、罠が発動していない。馬車に乗っていたせいかもしれないが、それにしてもあれだけ罠だらけの道のりだったのに、ぱったりとなくなってしまった。
これはこれで怖い。
それからまた馬車を進めると、湿気まみれだった不快な空気がなくなり、少し暑くなってきた。

「……暑いな」
「クレイも？　俺だけかなと思ってた」
「ピュィ」
ビーが怯えたそぶりを見せていないから、近くにモンスターがいるわけではない。
湿気で息苦しかったのに、今度は暑さで汗が噴き出す。急にこんな暑くなるなんて、やっぱり何かあるに違いない。
――タケル　扉だ
馬プニさんに言われ前方を見れば、そこには扉というか巨大な門が立ち塞がっていた。
道を塞ぐ壁と、クレイ四人分くらいの高さがあるとても大きな石の門。門の片方だけでも何トンあるんだってくらい、重厚。
門には古代カルフェ語で文字が書かれていた。
「ここは第一の門。勇気を試す炎の部屋」
口に出して文字を読み、後悔。第一の門って。聞いてない。なにこの試練みたいなの。
「まじないの唄（うた）のようだ」
「なにそれ」
「うむ。我らリザードマンの古き伝承にまじないの唄があるのだが、一つ炎に焼かれましょう、二つ氷に眠りましょう、三つ鋼の心を持ち、四つ永久に名を遺そう……」

「まじない？　何のまじない？」
「強き心を奮い立たせる、子供のまじないだ。怖気（おじけ）づいたときに唱えると、偉大なる祖先が手を貸してくれるという」
手を貸してくれるわりには一つ目で焼き殺すのかよ。まじないっていうより、呪いの唄じゃないか。
四つまで詩があるということは、部屋が四つあるのかな。
ひとまず調べておきましょう。
「探査（サーチ）……ああうん、この門の向こうにモンスターがいる」
「なんじゃと⁉」
きっと炎を放つような、そういう厄介なモンスターだ。しかも一匹じゃない。探査（サーチ）の反応だと少なくとも十匹以上。
門を通して熱さを感じるくらいだ。炎の威力もすさまじいはず。
でも、珍しいモンスターだったら、珍しい素材が手に入るかもしれないな！

3　不知火～しらぬい～

第一の試練だか何か知らないけど、まずこの重厚な扉をどうやって開けるのかってのが問題ではないでしょうか。
片方の扉だけで何十トンもありそうなんだよ。開けゴマで素直に開きゃいいんだけど、今までのしつこい罠の仕掛けから考えて、そう簡単に開くようなものではないはず。
「調査（スキャン）」

【試練の扉】
材料：イルドラ石、ジルア銅、ゼノラ岩、銀
製作者：レドラ・ガル
リザードマンのみが開くことを許されている扉。

あれ。
簡単に開くようなものだった。
ブロライトが必死に押したり引いたりしているが、うんともすんとも言わない。リザードマンのみが開くことを許されるというのなら、きっと俺でも同じ結果になるのだろう。
同種なら盗掘目的でないと確信しているのか、鍵すらかけていないとは。
「クレイ、この扉はリザードマンにしか開くことができないらしい」

「……扉を開くところから試練のはじまり、というわけか」
「いやそれは知らんけど」
神妙な面持ちのクレイは巨大な扉を見上げ、拳に力を込めた。
未だ扉と格闘していたブロライトを下げさせ、その動向を静かに見守る。この扉がリザードマンにしか開けられないということは、試練とやらもリザードマン向けなのだろうか。
そもそも墓で試練てなんぞや、って話ですよ。試練って、対象者の力量や度量を計るってことだろう？　それが、こんな墓の中でやるなんてさ。
「俺の力を偉大なる祖先に示せと、そう仰せであるのだな」
「おお！　クレイストン、それならば胸を張って示すと良い！　貴殿の力ならば、祖先も納得せざるをえないはずじゃ！」
「ピュイ、ピュピュ？」
ビーの言う通り、扉を純粋に開けるのか、それとも力業でぶち壊してしまうのか。
クレイは目を瞑ってしばらく集中すると、突然カッと目を見開き、扉に両手をどしんと押しつけた。
「ふうんぬっ……！」
扉は微動だにしないように思えたが、ぱきぱきと何かが割れる音と共に、砂埃が天井から落ちてくる。

長年ずっと閉じたままだったであろう扉は、クレイの力によって静かに動きはじめた。
見上げるほどの巨大な扉がじりじりと押し進められると、僅かに開いた隙間から熱風がぶわりと漏れ出す。
「あっつ!!」
まるでサウナの熱風を浴びたような、皮膚を攻め立てる異常な熱が全身に纏わりつく。
ビーとブロライトは熱風に驚き俺の背に避難。しかしクレイは顔色一つ変えず、黙々と扉を押し進めた。リザードマンって暑さ寒さに強い種族だと聞いていたけど、こういった直接的な熱にも耐えられるのか。
そのままごりごりと鈍い音を立て、扉を押し続ける。
「扉が、開くぞ」
これ結界しておくべき？　熱くて死んじゃったりしない？　試練に魔法の補助は無効とか言わないよな。
だからそもそも試練って何なの。
クレイが通れるくらいの幅まで扉が開かれると、熱風は全身に覆いかぶさってくるように部屋から溢れ出た。例えるのならば、エアコンの効いた店内から外に出たら梅雨明けの灼熱都心部。アスファルトの照り返しでああもうとろけちゃう……という、あのクソ暑い日本の夏を思い出す。嗚呼、懐かしの故郷よ。

「タケル、この暑さはなんとかならんのか？　わたしは、どうも、暑いところは、苦手で」
ブロライトが俺の背で熱風を避けつつ悲鳴を上げる。エルフって常に涼しそうな顔で何でもありません、みたいに装っているけど、やっぱりこう暑いと逃げ出したくなるんだな。確かにこの暑さは、尋常じゃない。
「ブロライト、クレイ、前に渡してあっただろ？　ミスリル魔鉱砂（まこうさ）で作った結界（バリア）の魔道具（マジックアイテム）。あれを起動させれば、少しだけ暑さから逃れられると思う」
「なんと！」
エルフの郷からベルカイムに戻ったときに造っておいたんだ。
鋼の肉体が自慢のクレイと、風のように素早く動けるブロライトには不要かもしれないが、念には念をということで渡しておいた。
これを造ったのは、ペンドラスス工房のリブさん。結界（バリア）効果のあるミスリル魔鉱砂を入れたペンダントを造ってもらったのだ。リブさんにはお守りの砂が入った銀の玉をペンダントに加工してくれと頼んだ。ただの銀の玉だったものに、リブさんはえらく綺麗（きれい）な模様を描いてくれたんだよ。
こういう魔道具（マジックアイテム）に頼らなくても俺には魔法があるんだけど、結界（バリア）を全員に張り続けるには集中力がいる。もしも疲れて集中力が途切れてしまったら、結界（バリア）の効果もプツンと切れてしまうのだ。魔法の効果を描き続け、集中に集中を重ねなければ命にかかわる。万能に思える魔法の力だが、万能足りえないのは、それを扱う俺自身が未熟だから仕方がない。

俺の集中力が途切れても魔法の効果が続けばいいんだけど、それがまた難しい。そういうイメージで魔法を作ることもできるとは思うんだ。自信がないだけ。
そんなわけで、効果を持続させるには、ミスリル魔鉱石から削り出した魔鉱砂に頼るしかないんだ。
「起動」
ブロライトは服の下に仕舞っていた銀色のビー玉サイズのペンダントを取り出し、顔から汗を流しながらそう口にした。
銀のビー玉にポッと光が灯ると、光は一気に全身を包み込む結界となる。巨大ナメクジのような強敵が相手だったとしたら、この結界は数回しか持たないだろう。しょせん素人の俺がぺぺっと造った付け焼刃。専門知識がないままイメージだけで造り上げた玩具のようなもの。即死のダメージを数回回避できるだけでもマシだと思ってもらいたい。
ただし、暑さ寒さ程度だったら半永久的に効果を発揮することが可能のはずだ。
「どう？」
「……うむ。幾分ましになったようじゃ。これならば、耐えることができる」
暑さで赤かったブロライトの肌が次第に元の色に戻っていく。汗もしばらくすれば引いていくだろう。
クレイはペンダントを爪の先でつまんだまま沈黙していた。

「クレイ、どうしたんだよ」
「もしもこの扉の先が俺を試す場だとするのなら、俺はお前の力に頼るわけにはゆかぬ」
「別に頼っているわけじゃないんじゃないかな。利用できるものは利用するだけで。誰にも頼っちゃいけませんよ、なんて何処にも書いていないし」
「タケル、クレイストンの申すこともっともじゃ。我らはクレイストンを黙って見守るしかないのではないか？」
試練のルール？　決まり事？　がわからないんじゃ、うかつに補助魔法をかけることもできないのかな。
ブロライトに諭され、それ以上言うのはやめた。クレイが心に決めているのなら、俺はしつこく言わないでおこう。殴られるから。
相変わらず熱風が顔面を攻撃してくる。この暑さ、辛いっちゃ辛いんだが、我慢することはできる。真夏の灼熱日本で経験したことのある暑さだ。それに、サウナでも水を飲みながら二十分は耐えることができるからな。
「二人とも、扉の中に入る前に水分補給。あと個人でも魔法瓶を持ってくれ」
「うむ」
「何故じゃ」
「この暑さで身体の水分が急激に奪われる。喉が渇くだろうし、熱中症になって倒れでもしたら大

変だから」
特に巨体のクレイに倒れられたら、どうやって運ぶよ。
鞄の中から魔法瓶を三つ取り出した。空間術を施した魔法瓶は最大容量大樽二つ分。不慮（ふりょ）の事態で離ればなれになっても、しばらくはこれで大丈夫。
巨大な扉にしがみ付いて遊んでいたプニさんは小型化してもらい、ビーの背中へ。そのビーは俺の鞄の上にしがみ付いてもらう。熱風で飛ばされないよう注意し、鞄の上からビーごと布で固定。魔法瓶のショルダーを肩にかけ、これで準備よし。
「入るぞ」
クレイを先頭に、俺、ブロライトと続く。
部屋の中は砂嵐のようなもので視界が遮られており、熱風と共に赤茶色の砂が吹き荒れていた。まるで真昼の砂漠に迷い込んでしまったようだ。
地下だというのに灯光（ライト）がいらないほど明るい。どうしてなんだろう。
「ピュイ！」
何も見えないなか、ビーが警戒警報発令。何処かに何かが潜んでいるのか？
「探査（サーチ）……前から三匹、後ろと右から二匹ずつ。動きが素早い。ロックバード並み」
「了解した」
「わたしは後ろを！」

それぞれに武器を手にし、戦闘態勢。
俺もユグドラシルの枝を杖に変化させ、両手に構える。
激しい風の音に紛れ、何かの叫び声。ギャア、ギャアア、という音がはっきりと耳に聞こえた瞬間。
「グギャアア!!」
何かの絶叫を合図に、砂嵐の先から熱風が炎と共に吐き出された。
「盾展開！」
「ぬおおおっ！」
俺が盾で炎を止めるのと同時に、クレイが前に飛び出し手にした長剣で砂嵐に突き刺す。
「ギャアヒッ！」
何かがえぐれる鈍い音と、叫び声。
どさりと地面に叩きつけられたのは、巨大なオレンジ色のでっぷりとした鳥。
「ぬうっ？　これはフロガ・ターキだ！」
「なにそれ！　ぶぺっ、ぺっ」
「灼熱の炎を口から吐き出し、獲物を焼き尽くしてから丸呑みにするBランクのモンスターだ！」
叫ぶたびに口の中に砂が入る。
モンスターは別にいいんだけど、というかクレイが知っているモンスターなら対処の仕方もわ

かっているのだろう。
問題はこの砂嵐と熱風だよ。さすがに数メートル先も見えないのは怖い。ここで罠が仕掛けられていたら、まんまと引っかかる自信がある。
ああもう、なんでこんな面倒なところに面倒なモンスターが出てくるんだよ。これが試練？　とかいうものなのか？　クレイのご先祖様も面倒くさいもん造りやがって。
いっそのこと全速力で逃げるっていうのも手だよな、なんて考えていると。
「タケル、フロガ・ターキの肉は美味いのじゃ！」
「なんですと!!」
「ピュッ!?」
ブロライトが嬉々として叫び、俺も目の色が一気に変わった。
ビーも驚きの声を上げている。
美味しいお肉が相手ならば、話は変わる。チーム蒼黒の団のエンゲル係数は恐ろしく高いのだ。特に鶏肉は大人気。
「砂に埋もれる前に倒した奴から回収する！　ブロライト、回収手伝え！　ビー、俺の背中に移動して、絶対に離れ、痛っ！　爪立てんな！」
「おりゃあああっ！」
クレイがばっさばっさと倒していく間、俺とブロライトはせっせと絶命した鳥の回収。

それでも激しい風の影響で、倒した側から砂に埋もれてしまう。この砂、本当に何処から吹いてくるんだよ。迷惑だな。
クレイを直接手助けするわけじゃないから、いいよな。もしもブッブー、失格、なんて言われたら腹を空かせたチームメンバーのためだったんです、と泣き落とそう。
「ちょっと本気で強めにいく」
できるだけ広範囲をカバーするように。
モンスターを倒す間だけでいい。強い風がやめばいい。
ユグドラシルの杖を両手に持ち、砂を吸い込まないように気をつけながら肺を膨らまし、腹に力を入れる。
「結界展開っ！」
今まで試したことがなかったが、イメージできるのなら実行できる。モンスターごと全て結界の中に閉じ込めるように、光の膜を一気に解き放った。
結界は砂もモンスターも全てを包み込み、広い範囲をカバー。おかげであれだけ吹き荒れていた砂や熱が、一気に治まった。
よし、これで戦いやすくなったぞ。
これがもしも対リザードマン用の試練だとしたなら、後はクレイに頑張ってもらいましょう。
砂嵐がぴたりと治まると、この地下空間らしき場所の全容が明らかになった。

立ち読みサンプル
はここまで

どう作られたのかはわからないが、学校の体育館ほどの広大な四角い部屋。壁にはでっかいファンのようなものが回っており、結界の外では勢いよく風が吹き荒れている。
高い天井にいくつもの大きな照明らしきものがある。あれが熱と光を放っていたのか。
両方とも魔道具だと思うが、ずいぶんと大きなものを造り上げたな。あの動力源は何だろう。
「ピュイ、ピュー」
「そうです、まだ暑いです。さすがのわたくしでもこの暑さは我慢なりません。ああ、忌々しい」
俺の背中に隠れていたビーとプニさんが声を上げた。
神様すら弱音を吐く暑さが続くと、いくら水分をとったとしても意味がない。というか、プニさんがキレて何をするのかわからない。
「わかったわかった。天井にある装置がこのバカみたいな暑さを作っていると思うんだ。あの照明、いくつか壊してもいいかな」
「あのようなところ、如何にして壊すのじゃ」
「うーん……俺の魔法をぶつけてもいいが、絶対に外す。遠すぎる」
「何かを投げたらどうじゃ」
「ああそっか、エルフの郷でもらった弓矢を試してみればいい」
「おお！」
足元は砂地で動きにくいが、あの風がなくなっただけでも良しとする。